

経営の両重性

——三戸助教授への疑問を出発点として——

山崎俊夫

まえがき

- 一、一般と特殊の相対的把握
- 二、企業活動の主観的統一と客観的統一
- 三、特殊における一般の主観的内在
- 四、経営の両重性に対する方法論的反省

むすび

まえがき

「経営セミナー」第二巻七号及び八号に、「一般と特殊」に関する三戸助教授と岩尾教授との間の論争が展開せられた。この論争から、一般と特殊の関係について、考え方に二通りの理解の仕方が派生的に見出されて来るように思う。すなわち、抽象と具体によつて把握せられる一般と特殊の関係を、主観と客観の区別を導入することによつて理解しようとする立場と、没主観的に客観法則としてのみとらえようとする立場である。三戸助教授は、一般

と特殊の関係が、経営学や経済学での矛盾や二重性であることを否定せられる。岩尾教授は逆にこれを肯定せられる。然しながら、両者の間に、このような肯定と否定の立場の差はあつても、一般と特殊の関係を抽象と具体の差によつて没主観的な立場で相対的に把握せられる態度には変りはないようである。

一方、馬場教授と岩尾教授は、共に個別資本の運動把握を経営学において意図せられながら、馬場教授が個別資本の運動に主観的契機を認められるに對して、岩尾教授は否定せられる。斯くて、岩尾教授の場合、個別資本の運動の中に把握せられた一般と特殊の関係は、主観と客観の差によることなく、既に冒頭に述べた通り、抽象と具体の相対的な差を没主観的に理解せられたこととなる。岩尾教授の方法が、三戸助教授に反論せられるに際して、一般と特殊の関係を三戸助教授とひとしく没主観的に抽象と具体の相対的な差によつて把握せられるものであつたところから、両者の論争は、経営学の領域においてというよりもむしろ没主観的な

経済法則の面で展開せられる結果になつた。

個別資本の運動の内部における主観と客観の連がりについては、フェイヨル管理論によつて示唆せられるところが多いように思う。フェイヨルが、一般は特殊の中に内在せしめられ、特殊によつてのみ具体化せられると考へたとするならば、このフェイヨル流の考え方は、客観論ながら、尚、主観的契機を尊重したものではなかつたであろうか。そして、個別資本の運動に主観的契機を認めようとせられる馬場教授の方法は、フェイヨルによつて示唆せられながらも、彼自身において充分に意識せられなかつた経営学の方法を、更に科学的に徹底せられたことになるのではないか。のみならず、馬場教授の方法に従つて、個別資本の運動の内部に主観と客観の区別と連がりを求めるとき、一般と特殊もまた経営の二重性となりうるように思うのである。

本論題を経営の「両重性」とした所以は、以上のことを考へるにあつて、最近の中国における矛盾論に関する文献を若干参考にし、考慮に入れたことを示すに過ぎない。中国の矛盾論争については、機会を改めて整理してみたい。ここでは単に一、二の経済学者の意見を代表的に拾つて、一般と特殊の関係が経済学の分野でどのように取扱われているかを例示してみた。これらの例では、一般と特殊の問題は単なる抽象と具体による相対的な比較だけでなく、抽象と具体による一般と特殊の関係をより細かく検討して、更に明確な発展段階的考慮や、主観と客観の概念を導入することにより、相交渉する関係において把握せられようとしている。このように、一般と特殊が相交渉する関係をもつてこそ、矛

盾の問題が生じてくる。中国やソ聯の矛盾論争は以上のことを反省させてくれると共に、更に、一般と特殊を経営の二重性として把握するためには、個別資本説は岩尾教授の方法ではなく、馬場教授の方法によらなければならないことをも裏付けているように思われる。

一、一般と特殊の相対的把握

三戸助教授の一般と特殊に対する考へ方の骨子は次の指適に現われていると思われる。

「一般は特殊よりより、抽象的な概念であり、逆に特殊は一般よりより、具体的な概念である。」^(註1)と。

このように、抽象と具体の概念によつて、一般があたかも特殊の平均であるかのように相対的に把握されたからこそ、三戸助教授は一般と特殊が矛盾ではないと云われ、経営の二重性ではないと主張されたのであろう。

この三戸助教授に対し、岩尾教授は次のように反論せられる。

「一般と特殊は、もちろん事物のもつ矛盾であり、対立物の統一の一つの姿である。特殊は一般の発展として生れながら、一般と相互に依存し相互に対立している。」^(註2)と。

然しながら、仮い特殊が一般の発展であるといわれるにしても、連がりはずしも明らかでなく、この場合の説明だけでは、単に一般と特殊が事物を分析して対立物の統一の中に要素として認められることが指適せられているに過ぎない。三戸助教授は一般と特殊を抽象と具体による相対的な関係として矛盾のないものに把

握せられ、岩尾教授は事物に含まれる矛盾の一つとして指適せられたにとどまる。一般と特殊の関係を、三戸助教授は経営の二重性の枠から外し、岩尾教授は経営の二重性であると主張されるにしても、経営の上で論理的にどう取扱うかについてはまとまつたものを語っておられない。結局、両者間のこの論争では、部分的断片的に岩尾教授の敘述の中に一般と特殊の関係が経営の二重性であることについての解釈を見出す外は、この問題に関する経営の本質についての体系的な説明は行われなかつたと見るほかはない。

岩尾教授が三戸助教授を反駁してあくまでも「経営の二重性」だと云われる根拠を求めて、「一般と特殊」についての教授の御見解を次に更に検討してみる。教授のこの「一般と特殊」の考え方は、三戸助教授の批判を部分的に入れて訂正された後の「経営セミナー」第二巻八号に比較的まとまつて来ると見られる。これを教授の論述に従つて三つの段階に分けてみることに、個別資本の運動把握を通して、教授の「一般と特殊」の考え方の骨子が大体整理されてくると思う。

第一段階 G—W/A Pm.....

これを教授は次のように説明される。

一般的には商品の買入れであるが、特殊的には、それによつて剰余価値をうる可能性をつかむ行程である。その特殊性は、労働力と生産手段という、質的にちがつた商品を一定の量的な比例関係で買入れることにより生れる。とくにそれは、商品としての労働力を買入れることにより生れる。と。

ここで予め注意すべきは、岩尾教授の場合と馬場教授の場合とでは、経営学の方法が異つてゐることである。馬場教授のように個別資本を具体的な姿にとらえられた上で、統一的に、意思的、統制的な側面を併せて考えることをしないで、云わば、いわゆる経営経済にこの側面をゆずつておられるわけである。従つて、ここで説明せられてゐる限りでの一般と特殊の関係は、具体的な労働力と生産手段という、質的にちがつた商品を一定の量的な比例関係で買入れる「行為として生れた特殊性を、より抽象的に考えるならば「商品買入れ」という一般性がえられるということに過ぎないのではないか。つまりこれは、特殊の中には、普遍的に共通する一般性が抽象せられるという相対的な把握となり、その意味では、三戸助教授の考え方と殆どえらぶところがなないように思われる。一定の量的な比例関係による商品の買入れが、労働力と生産手段という質的にちがつた商品の買入れとしてなされるのであり、殊に労働力の買入れが問題であるという以外には、この場合の商品買入れと剰余価値をうる可能性をつかむ行程という一般と特殊の間には、相互に具体的に影響し合う関係すら殆ど指適せられるところがないであろう。結局、教授の場合、「一般と特殊」の関係は、相対的な具体と抽象に置換えて考えられているに過ぎないのであり、而も把握の方法としては、矛盾の存在を主張して反駁されるに拘らず、結果的には三戸助教授と大差のない、全くの相対的客観論であることを裏付けるものではないだろうか。

第二段階 P.....

一般的には生産行程であるが、特殊的には資本家的生産行程で

ある。その特殊性は行程が労働行程と価値増殖行程の統一という二重性をもつ点にある。と。

労働行程と価値増殖行程の統一という二重性は、資本家的生産行程の特殊性としてだけ指適せられており、肝腎の一般的生産行程との交渉関係には何らふれられるところがない。云わば社会的総資本との関係において生産行程を資本家的に行っているのが第二段階の特殊性だと云われるに過ぎないのではないか。社会的総資本と個別資本を抽象と具体の相対的な関係でとらえ、共に客観的範疇において没主観的のみ把握された岩尾教授の方法は、この場合にも明確な性格を現わしているわけであろう。

第三段階 ……W—G'

一般的には商品の販売であるが、特殊的には、それによつて資本価値および剰余価値を実現する行程である。その特殊性は、投下した資本価値より、市場からひき出した価値が大きい点にもと^(註3)ずいている。と。

個別資本の運動が資本価値増殖を目的としていることは発展段階的な経済法則の没主観的理解でも認識される。従つてこれが主観的統一意識を排した相対的把握であることも差支えなからう。然しながら、この段階が商品の販売という一般性として考えられるということには、発展段階的な考慮を認める程度で、この場合もまた同様にして経済学としてならとも角、経営学には何ら事物の具体的統一の中に影響し合う矛盾が明確に説明せられたわけではなからう。

以上の教授の説明が単に次のような目的を以てなされていると

するならば、経済学の分野では或いはこれだけでも結構充分かも知れない。すなわち

「ローゼンベルグが資本論註解で行つてるように、運動の環境としての流通行程の特質を、論理的に強調することを試みたわけである。つまり流通行程が、生産行程の二重性を反映してたんなる商品の売買であると同時に、価値増殖のしたがつて不払労働の準備もしくは実現である点を、論理的に浮彫にすることであつた。」^(註4)と。

然しながら、これだけでは、教授が敢て三戸助教授に反駁して、一般と特殊の経営における二重性を主張せられ、矛盾の存在を指適せられる充分な論拠にはなりそうに思えない。結局、問題は岩尾教授と馬場教授の経営学における方法の差にまでさかのぼつてみなければ解決できそうに思われない。

二、企業活動の主観的統一と客観的統一

岩尾教授は、企業を利潤をめざす資本家の活動としてとらえられ、この企業活動を、客観的・経済的側面と主観的・技術的側面という二つの契機の統一として理解せられる。客観的・経済的側面は「企業活動である限り、人間の意思にかかわらず客観的に展開せざるをえない側面であり、いわば企業活動を支配している経済法則が直接に作用する側面であるし、またその活動みずからが盲目的に経済法則の展開に参加する要素である。」

主観的・技術的側面とは「運動する資本の担い手である資本家ならびにその代理人である経営者の、意識的・計画的な活動であ

り、運動に内在する矛盾の意識的な調整である。この側面は、客観的・経済的側面が、資本家・経営者の意識に反映したものであり、一定の条件のもとで具体的な目標をめざす資本家・経営者の意識的活動であり、ひろい意味での経営管理の活動である。客観的・経済的側面は、ふくざつな協同作業によつて行われるばかりでなく、そのなかに深刻な矛盾をはらんでいるから、企業活動にとつては、程度の差こそあれ、この活動を欠くことはできない。」と云われる。

ここで先ず、客観的・経済的側面と主観的・技術的側面という企業活動の分類の仕方そのものに疑問がないわけではない。価値的側面と素材的側面とは共に個別資本運動の二つの側面であることを考えるならば、企業活動にそれぞれ客観的とか主観的な語を冠したにしても、斯くて分類せられた企業活動とは、一体共に個別資本の運動それ自体であつてはならないものだろうか。そして教授が経済的側面と技術的側面にそれぞれ主観的とか客観的とかの語を敢て冠せられることにより、問題は一層複雑化し、混乱してくるように思える。あたかも醍醐教授が嘗て歴史的・経済的価値増殖過程と社会的・技術的労働過程とを対立させられたと同じような分類上の疑問である。この疑問は、やがて岩尾教授が次のように云われることにより、愈々方法論の根本的問題にまで発展する。

岩尾教授は先ず次のような馬場教授の所説を取上げられる。

「具体的な個別資本の概念のなかに意思的、統制的なものを含ませしめることは、あくまで可能且つ必要でなければならぬ」と思う。」

そして次のように述べられる。

博士は、ここで意思的・統制的なもの、あるいは側面を、個別資本の概念のなかにいれられており、個別資本の具体的な姿としてとらえられている。この点筆者は個別資本の概念のなかにはいれず、現象的な資本家の活動の一つの側面、契機としてとらえている。とらえ方のちがいは、論理的には抽象と具体でとらえるか、客観と主観でとらえるかのちがいになっている。あるいは、社会総資本の一環を具体的に見るといふ方法と、それを前提としながらも、企業活動そのものを独自のとりあげて見るといふ方法のちがいととれる。しかしそのようなちがいの点よりも、博士のばあいの、意思的・統制的なものとしてでないものとの内面的な関係が、潜越であるが筆者のばあいのそれとどうちがつているかが重要である。」

具体的な個別資本の運動が価値的側面と素材的側面を同時にもつた二重構造として展開されている以上、この個別資本の二つの側面は主観的にも客観的にも統一せられており、この二つの統一は、個別資本の運動自体における統一であつて、具体的には決して個別資本以外のものにおける統一を指すわけではない。個別資本の運動を把握する場合、斯かる関係を考慮せずして、主観的側面を個別資本の運動の外部に求めるとするならば、個別資本の価値と素材を離れて、いわゆる企業活動の主観的側面なるものが、個別資本の運動から遊離するに到るであらう。仮に立場を変えて岩尾教授の方法に従うにしても、この個別資本運動から離れたいわゆる企業活動の主観的側面の把握は如何にして可能であらう

か。資本の作用を、人的物的両要素の結合であると考へ、資本の機能の展開が意識的に行われるとみるならば、具体的な個別資本の運動には、まさしく個別資本の担い手としての資本家の意思的、統制的活動が含まれている。これに対して、岩尾教授のように、逆にいわゆる企業家の活動の中における経済法則を見ようとする立場も或いは不可能ではないかも知れない。然しながら、斯くて堅持された岩尾教授の立場では、教授が経済法則の追求を前提的に推進せられる限り、いわゆる企業活動の中から抽出せられた経済法則は、結局、没主観的な性格に終るであろう。斯くて教授は遂に、教授自身の不満とせられる従来の経営学と、教授の研究せられた経済学の二本立に何時までも悩まされて、両者の統一を實現することの困難に逢着せられるのではないだろうか。

企業活動を分析して要素としての主観と客観の抽象的な側面を別々に追求される場合、客観的・経済的側面であると云われる個別資本の運動は決して主観的な統一の姿をとることなく、専ら特殊の中に含まれる一般への近接の度合が相対的に眺められることになる。斯くて、仮い客観的経済法則における社会的総資本の中の特殊的統一を個別資本相互間に普遍的に認められることにはなつても、普遍的抽象への近接の度合により、特殊の中に含まれたより抽象的な一般とより、具体的な一般との間の相対的な関係の把握にとどまることになる。そして勿論、個別資本自体の特殊化における主観的統一の問題は何時までも具体化しないに違いない。そうとするならば、岩尾教授における一般と特殊の関係は、折角ながら、三戸助教授の場合同様、遂に経営の二重性の枠外に逸脱

せざるを得ないのではなからうか。斯くて、むしろ教授の場合こそ、意思的・統制的なものとするのでないものとのこの両者間の結びつきは、それが企業活動として外部に表現せられているだけで、内面的には実際にどう結びつくか甚だ不可解という外はない。

馬場教授と岩尾教授との間の方法の差を、抽象と具体、主観と客観の区別によつて簡単に割切ることとは不可能である。馬場教授の抽象と具体との間には主観的統一と客観的統一の交渉がある。馬場教授は個別資本を抽象的な一般の姿のまままで経済法則と同一視されることなく、極めて具体的な特殊に考へておられる。具体的に把握せられた個別資本の運動の中には、意思的、統制的なものとするのでないものが見事に統一されている。個別資本の運動自体、主観的統一として展開せられた客観的統一である。換言すれば、馬場教授の場合、個別資本の運動から離れた主観的な企業活動の側面は存在していない。唯、岩尾教授の場合、主観的・技術的側面と云われるものが個別資本の運動とは別個に存在していることになる。斯くては、本来経済法則を離れた主観的側面が、経済法則とは無関係に外部から個別資本の運動を展開することになりかねない。結局、斯かる経営学は、経済学から孤立した存在にならざるを得ないであろう。而も一方、個別資本の運動は専ら没主観的な抽象と具体の概念による相対的度合においてのみ把握せられる。いわゆる企業活動の中に個別資本の運動に関する面の存在は裏すけることはできても、換言すれば、企業活動の中に経済法則が求められて、それはむしろ社会的総資本の説明を裏すけることにはなつても、それは依然として経済学であり、一般と特

殊の経営における矛盾についてはいささかも論ぜられるところが無いであろう。

三、特殊における一般の主観的内在

特殊における一般が企業活動の主観的統一と客観的統一の交渉の上に現われることについて、山本安次郎教授「フェイヨル管理論研究」から得られた示唆を次のように考えてみたいと思う。

フェイヨルの場合、一般と特殊の矛盾を考え、その矛盾の克服方法は、統一的な普遍を求めて特殊に内在する矛盾を矛盾たらしめないように実践的に努力することではなかつたかと思われる。それは経営管理において経営の二重性の統一を実現する方法ではあつたけれども、また本来一般と特殊が抽象と具体の関係において矛盾であることを否定するものではなかつたわけであろう。従つて、フェイヨルでは一般が特殊の中に抽象と具体の関係において内在している。然しながら、特殊の中に一般の内在を抽出してみたところで、それだけでは普遍的法則における客観的統一としての平均的一般を求める相対的な手段と何らえらぶところは無い。然るにフェイヨルの場合は、経営実践の方法が論ぜられているわけであるから、単に一般が特殊の中に客観的に内在しているだけでなく、一般を特殊の中に内在させるための主観的努力がなされているものと見られる。すなわち、一般は客観的な特殊の中に主観的に統一せられ、内在せしめられるのである。斯くて、客観的な特殊の中に主観的に内在せしめられた一般が、客観的にも主観的統一としての特殊の中に内在する結果となつたのである。

従つて、フェイヨルにおける一般と特殊の関係を、特殊の中に内在する一般という客観的な把握の仕方では理解するにしても、尚、そこに主観的契機（註9）の存在を認めることができるわけである。この方法こそ、馬場教授の方法に通ずるものではないだろうか。そして、「客体的把握の重要性はいうまでもないことであるが、これによりつつこれを越える主体的把握においてのみ経営学は可能となる。」と云われる山本教授の主張は、馬場教授によつて個別資本説としての更に科学的な根拠を与えられた体系に徹底する。逆に岩尾教授の方法に徹底するならば、この山本教授の主張は、遂に経営学と経済学に再び分裂し去つてしまう運命に逢着せざるを得ないに違いない。

四、経営の両重性に対する方法論的反省

再び問題を経済法則の中における一般と特殊の関係に戻して検討を続けてみる。呉海若氏は再生産過程が生産力発展過程と生産関係発展過程の統一であると考え、両者の関係を一般性と特殊性の相互交渉として把握する。そして次のように云われる。

再生産原理を研究する場合、生産力と生産関係の統一発展過程から出発し、物質生産の発展過程の反映である一般性と、一定生産関係の発展過程を反映する特殊性の統一から出発するのでなければ、正確な理解に到達することは不可能である。経済学の研究対象は生産関係であるが、このことは唯々研究の重点を指しているわけであつて、もしも生産力と生産関係の矛盾統一における生産関係を研究するのみであり、土台と上部構造の矛盾の中で生産

関係の研究だけにとどまつて、生産関係の研究のみを孤立的に取上げるとするならば、必然的に全面的な客観過程の本質の認識が不可能となるであろう。^(註10)

右の説明がいわゆる上部構造論であることは一見して明かである。そして、吳海若氏のいわゆる生産力が主として自然科学的法則に関するものであり、生産関係が社会科学としての経済学の対象であることを意味しているともとれるであろう。従つて、ここにいわゆる再生産原理とは特殊に経済法則を意味するものであると一概に規定することはできないかも知れない。それにしても、この説明から、一般性と特殊性の区別は又、経済法則内部の発展段階においても通用しうることが同行論の先行箇所にも氏自身の意味に考えていると思われる例があり、決して不可能ではない。勿論、ここで一般性と特殊性が何故に矛盾するかということについての積極的な論理を見出すことは不可能である。そして、方法としては客観法則の追求が没主観的に行われているのみであつて、主観と客観の区別には何らふれられたわけではない。唯々発展段階的に一般性と特殊性が相交渉する意味において矛盾として認識せられ、斯かる矛盾の統一として、再生産原理の発展過程が総合的に把握せられなければならないことを指摘せられただけである。ここでは単に中国の両重性論争に、斯かる生産力と生産関係の矛盾の形で一般と特殊の相交渉する関係が把握せられようとしている場合が可成り多いことを紹介するとどめて一応次に移る。

一般と特殊の関係が今一つ圧倒的に多く論ぜられる例として、

労働の二重性の問題をあげることが出来る。そして、この問題はまた可成り多くの場合同時に商品の二重性としてそのまま取上げられて行く。次にいささか長い引用になるが、柳谷崎氏「ソ聯の社会主義商品と労働の両重性に関する討論」の中に紹介せられたソ聯の庫庫施金氏の掲げる論争の一つをそのまま取出してみる。社会主義商品には内在的な客観的矛盾問題が存在するか否かについて、三つの意見が見られる。

(1) 否定説

社会主義商品は統一的な直接的な社会労働によつて作られたものである。故に社会主義商品の中には何らの内在的矛盾は存在しない。その論拠は「社会が生産手段を掌握し、更にそれらを直接の社会生産の中に運用する時は、各個人の労働はその有用性の差異の如何に拘らずまさに直接的な社会労働を行うことになる。」というエンゲルスの指摘である。

(2) 条件的肯定説(主観的肯定説)

社会主義建設が実践せられている間は、経済法則には特殊に国民経済が計画経済として現われ、発展法則の要求に背離を生ずる時である。従つて商品には使用価値と価値との間の矛盾を生ずることがある。仮えば、個別企業の領導によつて生産物価格計画作成の努力の完成した後企業にとつて更に有利な生産に努力し、生産計画が全部の品種について規定できなかつた場合。このような場合は矛盾ではあつても對抗性を有せず、計画的な指導方式を通じて充分解決できる。

(3) 庫庫施金氏本人の意見(客観的肯定説)

(イ) 否定説に対する批判

エンゲルスの指適の誤用である。エンゲルスの原理は、一切の生産手段と全部の生産物の所有がなされているような条件下の社会では正しい。然し、国家所有制と集体所有制とが同時に併存しているような条件下では、国家は社会を代表するが、一切の生産手段と生産物全部の所有者ではない。この故に、社会主義商品が統一的な直接の社会的労働の作つたものであり何ら内在的矛盾を有しないと説くことは、此の意味から成立たなくなる。

(ロ) 条件的肯定説に対する批判

この意見では、社会主義商品の矛盾を部分的、偶然的な指導に依存する事情と見ている。もしも指導が失敗するなら商品の矛盾が生ずることになる。指導が良ければ矛盾はないわけである。このように指導者の如何によつて二要素的な見方をすることは、主観的な見解だと云わざるを得ない。これでは社会主義商品に矛盾があるという客観的な説明にはならない。

(ハ) 庫庫施金氏本人の客観的肯定説

企業の指導者が生産物価格計画を完成しようとして、品種計画を完成しえない時に矛盾が生じたわけではない。従つてその矛盾は商品のもつ固有のものである。そして国民経済に生じた損失を公けに表現したものである。

ソ聯国家は計画を制定し、企業を督促して品種を考えコストを計算させて生産計画を完成するに際して、實際上、このような矛盾を考慮することに力を入れている。仮い矛盾が考慮されるに到らなくとも、正確な価格政策下にあつて矛盾が解消してしまつた

というわけではなくて一定時期に正確な解決がえられたのである。これは経済機構の正確な運行がもたらしたものである。然し、矛盾という意識的な解決と、それが人々の正確な行動を通過して得た解決の必然性は、又、商品の矛盾の表現形式の一つである。要するに、矛盾は事実行為を通過し、貨幣に助けを借りて解決するものである。ただ、矛盾解決の際に、場合によつて我々は形式的にその矛盾を考察することのできないことがあり、又、或場合には、商品の実現が困難となつたときに、却つてこうした矛盾の作用を明確に見ることもある^(註1)と。

右の庫庫施金氏の所説に無条件に全面的な支持ができるわけではない。むしろ数々の疑問も存在する。一例をあげるならば、労働の二重性の問題にしても、彼には抽象と具体の概念による区別がない。彼の場合、社会関係を通しての抽象労働と直接的具体労働が完全に混同せられている。つまり、一般と特殊の關係の根本問題である抽象と具体の区別において既に納得できない点がある。そして、労働の二重性が何故に商品の二重性と連がりをもつかという点についても勿論ここで十分な説明があつたわけではない。従つて、否定説に対する彼の批判でさえ未だ完全に問題が片付いたことにはならないように思える。それにしても、方法論的に彼の論理には、多分に主観と客観の区別についての示唆を含めている。これは単に一般と特殊の問題に限らず、矛盾そのものを経営の上でどう考えて行くかについて極めて大事なことである。

先ず、右の論争に現われた主観的肯定説に対する彼の批判を裏

返してみるならば、主観的肯定説は、経済法則といわゆる企業活動の主観的側面とを分離したことによりおかされた誤謬であると思われる点で、云わば岩尾教授の立場にも似ていると考えられなまいだらうか。然し、主観的肯定説に対する彼の批判は、経済法則の客観的把握が主観的になされたことへの攻撃であり、このことは勿論彼自身、客観的統一における主観的契機を否定したわけではなくた筈である。のみならず、彼の論理を右のように見るとすれば、経済法則の具体化である経済機構という客観的統一自体の中に既に矛盾が存在することが認められる。そして、その矛盾は、矛盾という意識的な解決と、それが人々の正確な行動を通過して得た解決の必然性とにおける、商品の矛盾の表現形式の一方であると云われる庫庫施金氏の指適こそ、まさに経済学であるよりもむしろ経営学的示唆を盛つた意見として尊重したい。要するに、以上のように考えられた彼の論理では、主観的肯定説に対する彼の批判は、これが経営学的方法ではなくて、単に経済学の方法における非客観性をもつことの指適であつたことに注意したいと思う。そしてこの批判は又、同時に岩尾教授の方法の企業活動における主観的側面に対する批判でもあると思うのである。

斯くて庫庫施金氏の客観的肯定説には、経済法則の内部における特殊である経済機構に、尚、経営学的方法により、主観的契機を認めようとする立場が現われているように思える。この点、彼の所説は又、馬場教授の個別資本説に方法論的に通じうる道をもつのではないか。然しながら、ここで一般と特殊の概念によつて、具体的な特殊を考えてこそ、特殊の中に主観的契機を認めうるこ

とを条件的に考慮しておく必要がある。個別資本には、抽象と具体、主観と客観と共に、呉海若氏のように、発展段階的な把握も必要に違いない。以上のような諸概念を含めて、個別資本を具体的な特殊とみることに、個別資本の運動を経営の二重性に把握し、一般と特殊を経営の二重性として考えることは決して無意義なことではないであらう。

思うに、一般と特殊を矛盾として認識するためには、特殊の中における一般とこれに対立する他の一般とをどのように統一するかという、特殊における統一の事情にさかのぼる必要がある。矛盾概念のカテゴリーの中では絶対的な矛盾の要素ではあつても、事物の特殊における具体的統一の中での結びつきには、種々なる度合が考えられるに違いない。本来具体的である特殊の中で、その絶対的性格において矛盾を構成する一方の一般の度合が、相対立する他の一般との衝突の結果、相対的に移りうることも考えておかなければならない。

勿論この場合、抽象と具体の相対的な概念によつて、様々な発展段階における程度の差を一般と特殊の矛盾の結果として客観的に認識することはできるであらう。然しながら、特殊における統一において異質的な認識がない限り、内在する抽象的な一般の具体的姿として、特殊相互間に相対的な度合を求めただけでは、三戸助教授の指適の通り、一般と特殊の間の矛盾は解消せざるをえなくなる。斯くて特殊とは、一般と、その一般に対立する他の一般とを統一する普遍概念となつてこそ、特殊におけるその統一の性格によつて一般と特殊は矛盾概念となり、この矛盾は更に他の

具体的な特殊の中に統一せられることになるだろう。そして個別資本を矛盾統一的な具体的特殊として認識する限り、一方、意識の層において個別資本の主観的統一の体系を把握してみるならば、主観と客観の概念を通じての一般と特殊の矛盾が含まれていないに違いない。

それにしても、三戸助教授が一般と特殊の関係を経済学や経営学の矛盾ではないと云われたことは誤りであろう。従つて、岩尾教授の一般と特殊を相対的客観論として三戸助教授の考え方と共に殆ど同一視して来たこれまでの仮説は基本的には誤りであつたことになる。確かに一般と特殊は、仮えば再生産原理における生産力と生産関係の矛盾や、労働の二重性の問題として、主として経済法則の面で矛盾の関係において把握せられることが普通である。然しながら、岩尾教授が個別資本を具体的な特殊に把握することにより、主観的な面を個別資本に認められない限り、教授の個別資本における一般と特殊が専ら没主観的な経済法則の問題にとどまることに変わりはない。従つて、これが教授の主張のように経営の矛盾や二重性となるためには、尚、馬場教授の方法によることが必要であろう。そして、庫庫施金氏もまた、岩尾教授の方法ではなく、むしろ馬場教授の方法によつて、本来的な経済法則の矛盾の表現が、主観的契機を通過するものであることを主張できているように思うのである。

む す び

三戸助教授は一般と特殊を矛盾としての区別のないものと考え

られた。様々な次元の段階の特殊の中に内在して顕現せしめられている一般は、抽象と具体の概念による特殊相互間の相対的な程度の差を通じて求められた共通的平均であり、その限りにおいて一般と特殊は矛盾しないと云われるのではないか。然しながら、ここで考えられている特殊とは、相対的な抽象と具体の差を除いては決して一般と区別せられる特殊ではなく、云わばより抽象的な一般と、より具体的な同じ一般としての関係にある。一般と特殊が矛盾しないと云うよりも、むしろ一般と特殊の中の同じ一般が矛盾しないと云われるわけであろう。然し、特殊そのものには更に突込んだ考慮が払われなければならない。抽象と具体の差における一般と特殊の関係は単に相対的な区別にとどまらない。本来特殊は一般と他の一般の対立という二重構造をもつが故に、そして又、一般は特殊によつてのみ現われ、特殊は時空の制限を受けて矛盾統一的な具体的特殊であるが故に、特殊のもつ斯かる統一の性格によつて一般と特殊が更に他の特殊における具体的統一に矛盾として現われるわけである。而もこの具体的な特殊には、抽象と具体の概念のほかに、主観と客観の概念が含まれなければならない。そして、云うまでもなく具体的特殊はまた歴史的且発展段階的である。

岩尾教授は主観と客観の区別による企業活動の把握を主張せられる。然しながら、教授の場合には、それはいわゆる企業活動におけるの考慮であつて、個別資本においてのことではなかつた。然るに馬場教授の場合は異なる。主観と客観の関係を具体的な特殊である個別資本において統一的に見ようとせられる。主観と客

観との連がりをもつた個別資本の運動把握を経営学の命題とせられたわけである。岩尾教授の場合、主観と客観の区別によつていわゆる企業活動を統一よりはむしろ要素的分裂に導き、主観の問題を後にして先ずいわゆる個別資本の運動という客観的側面の追求に努力せられる。従つて、岩尾教授もまた主観と客観の区別による個別資本運動の把握をとえられながら、而も三戸助教授に對して一般と特殊の關係を経営の二重性として反論されるために個別資本の運動における一般と特殊の矛盾を主張されつても、遂にその主観と客観の区別は個別資本自体において採用せられることがなかつた。その意味から、実際には三戸助教授同様、個別資本では専ら主観と客観の概念をぬきにした相対的な抽象と具体の差による一般と特殊の關係の把握にとどまられたわけである。

一般と特殊の關係が経済学や経営学での矛盾や二重性であることについては、三戸助教授からは勿論何らの支持も期待せられる筈がない。然しながら、発展段階的に一般と特殊の關係を経済学の分野において矛盾として取扱かおうとする意見は多い。再生産原理を生産力と生産關係の矛盾的統一として見た吳海若氏の所説はその一例であつた。そして、労働の二重性が一般と特殊の矛盾において把握されている例も又多いであろう。それにしても、普遍は個体に宿るのみならず、個体は普遍を宿るのであり、一般は特殊に内在し、特殊によつてのみ現象するというフェイヨルの示唆を、経済学に連がりを持ち、而も経済学を越えた経営学を樹立するために受取ろうとすれば、山本教授の云われるように主体的把握が要求せられる。個別資本説は、個別資本の内部に主観的契

機を認めることによつてのみ、経営学として完成する。岩尾教授の主張のように、一般と特殊が経営の二重性となるためには、教授自身の方法ではなく、馬場教授の個別資本説によらなければならぬ。そして、庫庫施金の所説もまた、結果的には岩尾教授への否定となり、方法論的にはむしろ馬場教授への支持となるであろう。

それにしても、三戸助教授と岩尾教授との間のこの論争からは、数多くの示唆を得た。文中、諸教授に對する未熟な誤解と不尊な暴言が多かつたことを思い、ここに謹んで陳謝申上げたい。

註1 「経営セミナー」経営書房第二卷七号（昭和三二年）八頁
或いは三戸助教授が一般と特殊の矛盾を云うことは屋上屋を架するにひとしいと云われたのは、一般が、特殊相互間の矛盾統一の結果であると考えられたからかも知れない。そう考えるならば、特殊と特殊は矛盾しても、一般と特殊は矛盾の要素にはならないであろう。然しながら、このような考え方もまた特殊から一種の平均を導き出すことに變りはなからう。

- 2 同 第二卷八号 二三頁
- 3 以上第一段階から第三段階まで 同 二三頁
- 4 同 二二頁
- 5 同 二〇頁
- 6 醍醐作三「労務管理論序説」泉文堂（昭和三〇年）仮えば一〇頁など参照
- 7 馬場克三「個別資本と経営技術」有斐閣（昭和三二年）四

一頁

8 前掲「経営セミナー」八号 二一―二二頁

9 山本安次郎「フエイヨル管理論研究」有斐閣(昭和三〇年)
一八六頁

尙、これについては、鹿兒島縣立大学商経学会「商経論叢」第六号(昭和三二年)拙稿「経営技術学試論(I)」をざらん願いたい。又、都筑助教の「フエイヨルの管理原則は経済原則から脱皮していると思われる」という御見解は、方法の上で筆者とは逆になる。

前掲「経営セミナー」九号 七三頁参照

10 吳海若「再生産原理の一般性と特殊性」の部分的抄録

「経済研究」北京・科学出版社一九五七年 第一期 五五頁

11 柳谷崗「ソ聯の社会主義商品と労働の両重性の問題に関する討論」参照

同 第二期 一三六―七頁